

# 長州藩における牛痘種痘法の導入と普及

小川亜弥子

## The Introduction and Dissemination of the Vaccination Methods in the Choshu Feudal Domain

はじめに

- ① 牛痘種痘法の導入
- ② 引痘掛の任命と種痘の開始
- ③ 諸士・卒、及びその家族への種痘奨励の布達
- ④ 諸郡種痘法の制定
- ⑤ 諸郡種痘法の実施
- ⑥ 藩領域を越えた種痘の承認
- ⑦ 諸郡種痘法の改訂  
むすび

### 【論文要旨】

明治維新史研究の中で、長州藩は、常に分析の対象とされてきた。このため、長州藩の幕末・維新期の研究は、必然的に、政治史・経済史的側面からの研究を中心としており、現在、膨大な蓄積量となっている。こうした中で、筆者は、当該期の長州藩を、洋学史的側面から焦点化する有効性を主張してきた。

周知のように、幕末期洋学史研究においては、当該期の洋学の性格規定をめぐって、現在二つの見解がある。一つは、洋学の軍事科学化を重視する見解であり、もう一つは、洋学の地方への展開、即ち在村蘭学を重視する見解である。換言すると、この二つは、当該期の洋学の担い手をめぐる問題に他ならない。まさに、田崎哲郎氏が分類した「体制内での立身・為政者への接近を指向した為政者指向型」と、「在地の蘭方医として地域的活動を専らとした在村蘭方医型」である。現在、当該期の洋学史研究では、大局的には二つの見解が交わることなく、各々が平行して究明を加えている。

筆者は、これまで、長州藩の洋学を、前者、即ち軍事科学的側面から検討してきた。しかし、同時に、後者、即ち在村蘭学の問題を放置して、幕末期洋学の性格規定をすることは不可能であると考えている。かつて、拙著『幕末期長州藩洋学史の研究』（一九九八年）で分析したように、長州藩における有名蘭学塾の出身者は、在村医及び地主豪農層においてその半数以上を占めている。緒方洪庵の適塾では八六%、伊東玄朴の象先堂においては六〇%にも上った。このように、後者の問題は、少なくとも長州藩における洋学の実態解明にとって、欠くことのできない検討課題であるといえる。以上のような問題意識の下、後者との接点を探りながら、長州藩におけるモーニッケ苗の導入・実施及び普及について検討したものが本稿である。特に、普及の過程については、諸士・卒、及びその家族への奨励、諸郡種痘法の制定と実施、藩領域を超えた種痘の承認などの段階を踏まえ、具体的様相を明らかにしている。

## はじめに

長州藩における牛痘種痘法の実施については、昭和二十六年（一九五二）年に、田中助一氏がその大著『防長医学史』の中で、「種痘史」の一環として扱っている<sup>〔1〕</sup>。しかし、その後、本格的に研究対象となることなく、等閑に付されてきた。そのため、同藩の種痘実施に関する記述の多くは、これに依拠する形で進められてきた。

田中助一氏は、「藩政記録」を根拠となる基礎史料としている。このたび、山口県文書館で史料調査を行ったところ、この「藩政記録」に相当するものは、明らかに「好生堂医学引痘沙汰控」及び「医学成立沙汰控」であることがわかった。筆者は、田中氏が著書の中で示した史料と、「好生堂医学引痘沙汰控」「医学成立沙汰控」の中の諸史料とを比較してみた。その結果、多くの誤謬を確認した。また、田中氏が使用した史料は、種痘にかかわる諸史料の一部に過ぎないことも判明した。

以上のような研究状況を克服するため、本稿では、長州藩における牛痘種痘法の導入・実施及び普及の過程について、再検討することを試みたい。史料としては、先の「好生堂医学引痘沙汰控」「医学成立沙汰控」を中心に使用するが、関連するその他の諸文書にも目を配っている。

なお、本論で述べるように、長州藩における牛痘種痘法の導入・実施は、嘉永二年（一八四九）である。これに際しては、藩の医学所済生堂の教職員が重要な役割を担った。済生堂の前身である医学稽古場は、天保十一年（一八四〇）九月に、長州藩の天保改革における文教政策の一環として、創設されたものであった。同稽古場は、単なる医師の養成・再教育機関であるのみならず、西洋知識の摂取機関でもあった。業論の都合上、ここでは、まず、嘉永二年に至るまでの同所における洋学の採用並びに興隆の過程について、簡単に整理をしておきたい。その際、牛

痘種痘法の導入・実施に中心的な役割を果たす人物の動向を中心に述べていきたい。

村田清風は、天保九年八月に地江戸仕組掛に任命されて、藩政改革の担い手として登場すると、坪井信道を長州藩の嘱託医として召し抱えた。清風は、早くから海防に強い関心を持ち、江戸の深川で蘭学塾安懷堂を開設していた坪井信道と親交を結んでいたのである。天保十年二月には、坪井信道・能美洞庵の推挙により、大島郡和田村出身の青木周弼が召し抱えられた。周弼は、能美友庵・洞庵父子に医学を学び、長崎でシーボルトに師事し、江戸へ出て信道の門に入り、さらに信道の推挙によって宇田川玄真に蘭学を学んだ。当時、彼は、同門の緒方洪庵とともに、新進気鋭の蘭方医として知られていたのである。同十一年九月、長州藩は、青木周弼の進言により、能美洞庵と賀屋恭庵を医学成立定掛に任命し、萩の南苑御茶屋内に医学稽古場を開設した。ここでは、医学教育に西洋医学が正式に取り入れられ、周弼による蘭書の翻訳が行われた。弘化元年（一八四四）十二月には、竹田庸伯が周弼の担当している翻訳書の補助を行うよう命じられている。庸伯は、天保八年十一月より大阪の蘭方医高良斎に師事していた。弘化四年二月、長州藩は、海外知識を吸収するため、松村太伸・青木研蔵・東条英庵の三人を西洋書翻訳御用掛に任じ、月に六日ずつ医学稽古場に出勤して時局に必要な洋書を翻訳するよう義務付けた。青木研蔵は、周弼の一二歳年下の弟で、弘化二年当時、伊東玄朴の門に入って蘭学を修業し、玄朴とともに海防に有益な西洋知識を佐賀藩に進言していた。長州藩は、玄朴と同様に佐賀藩が研蔵を召し抱えることを恐れ、彼を藩地に呼び戻した。西洋書翻訳御用掛として、その知識を長州藩のために生かすよう命じたのである。松村太伸は、吉敷毛利氏の侍医松村玄機の子で、当時、新進気鋭の蘭学者として名声を博した久坂玄機と並び称される実力を持っていた。嘉永二年二月、新明倫館の開設に伴い、医学稽古場は、構内の馬場沿いの西端に移転し、済

表1 済生堂教職員(嘉永3年6月)

職 名	職員名	年齢	階 級	専 門	石 高
頭取役	◎能美洞庵	57	大 組(本道医)	道三流	石 243.000
会頭役	◎赤川玄悦 ◎青木周弼	43	手廻組(本道医)	人見法印慶安伝	25.000
		48	大 組(本道医 西洋内科)	道三流 阿蘭陀流	25.000
都講役・書物掛	◎久坂玄機	31	寺社組(本道医)	道三流	25.000
本草科頭取役	◎河村養信	41	大 組(針医) 身柄一代(本道医)	意斎流 道三流	(42.500)
外科頭取役	松尾養琢 ◎烏田良岱	50	寺社組(外科医)	南蛮流	86.000
		47	大 組(外寮医)	阿蘭陀流科	12.125
針治頭取役	滝戸祐庵	33	手廻組(針医)	福井心斎伝	40.445
西洋原書頭取役	田原玄周 ◎青木研蔵	36	寺社組(本道医)	道流三流	30.000
		36	大 組(本道医 西洋内科)	道三流 阿蘭陀流	(25.000)
会業掛	二階養安 ◎長野文琢 仁保玄珠 岩佐清安 賀屋玄中	37	手廻組(本道医)	道三流	23.000
		34	大 組(本道医)	道三流	(48.207)
		32	手廻組(本道医)	道三流	28.100
		31	大 組(本道医)	道三流	194.213
		35	大 組(本道医)	道三流	147.500

\*1人扶持=4石5斗及び、銀10匁=1石で高直し済み。

\*石高・階級は、安政2年の分限帳より記載。

\* ( ) = 子弟。

\*◎ = 引痘御用の掛(嘉永2年～嘉永4年)

\*久坂玄機については、安政元年に死去しているので、弟玄瑞の分限帳記載分による。

註:「好生堂医学引痘沙汰控」,『萩藩給禄帳』より作成。

生堂と改称した<sup>(2)</sup>。医学稽古場は明倫館の管轄外であったが、移転を機に、明倫館による藩内文教政策の一環として明倫館教育に属することとなった。済生堂の教職員及び役員は、発足当初、一端解任されている。その後、能美洞庵が頭取役に、赤川玄悦・青木周弼・久坂玄機が会頭役に就任したことは判明するものの、それ以外は不明である。しかし、翌嘉永三年六月、済生堂が名称を好生館と改めた当時の教職員については明らかにできるので、参考のためここに示しておきたい(表1)。

## ①牛痘種痘法の導入

嘉永二年(一八四九)六月、佐賀藩医植林宗建の依頼に応じ、オランダ船が牛痘漿と牛痘痂を長崎にもたらした。出島のオランダ商館付医師オットー・モーニッケは、宗建の三男健三郎の上腕接種に成功する。佐賀藩主鍋島正直が積極的にこれを広め、以後、各地に牛痘種痘法が伝わったことは、周知の通りである。長州藩において、長崎での牛痘種痘

の実施状況や佐賀藩の動向などに関して、いち早く情報をつかんだのは、青木周弼であった。周弼は、彼の門人で当時長崎に滞在していた阿部魯庵から、七月二十二日付の書簡を受け取り、これにより情報を得たのである。この書簡は、「此地種痘ノミノ騒ぎ」であった当時の様子について、かなり具体的かつ詳細な内容を伝えているため、次に示しておこう。

当秋、蘭船牛痘持渡、種痘仕候処、幸伝染仕、此節ハ崎陽小兒四五十人も致し居候、尤阿部伊勢守様より之命之由にて、痘種不絶様被仰付候由二付、当奉行所よりも市中一統御沙汰相成、未タ痘瘡不仕兒ハ、尽く姓名書出ニ相成候、追々江戸よりも医師下りニ相成候趣ニ御座候、当時ハ此地種痘ノミノ騒ぎ御座候、年来之渴望漸時来り、生民之大幸ニ御座候、大石良一<sup>(マ)</sup>佐賀侯之命ニ而下り居候、佐賀より小兒連越し種付、隔日君公若君二種付被仰付候由、佐賀二而始り候へハ、九州ハ直ニ広り可申候、此節之種方始ハ舶来之牛痘種試ニ小兒而三人輩に種候処、漸々人老粒相発、其老粒を以、四人二種候処、四人尽く発し、四人より十三人、夫より逐々増し、明日又々四十人余り種候、皆是迄尽く発し、種候而四日目発し、八日目に膿汁ヲ取、直ニ他ノ小兒

二移事候、大抵二粒宛種へ二粒宛発し、微熱有之ものもあり、無之ものも御座候、皆々遊候而相済申候<sup>③</sup>

既に牛痘種痘法の有用性に関して知識を得、期待を寄せていた周弼は、早速、同書を能美洞庵に回覧した。周弼と洞庵は、長州藩においても速やかに種痘を実施する必要性を認識し、直目付を通して藩主毛利敬親にこの旨を上申した。藩主敬親は、二人の建言を認め、長崎に伝習医を派遣することとし、内意を青木研蔵に伝えさせた。これを受けて、研蔵は、直ちに自費での伝習を出願した。出発に当たり、敬親は、手元金八両を与え、伝習の責務を果たすよう激励した。以上の経緯については、次の史料に見ることができる。

右ハ（阿部魯庵―筆者註）青木周弼門弟二而長崎江罷居、彼地より申越候、書面周弼より能美洞庵江差出候由二付、御直目付三人より請取之候、彼役座より及御内分候処、何とそ伝授差越候様御噂も被遊候由二付、周弼養子青木研蔵事、自力を以罷越候様願出候段、内移相成候付、下より願出被差免候、右二付、勘渡之御心持を以、金八両御内々被就御氣付候事

西八月十七日、触出相成候事<sup>④</sup>

青木研蔵が兄に当てた書簡より、出立後の具体的な動きを知ることができる。

（前欠）一件直様、大石良英江罷越聞合候処、此節種痘最中、良英も昼夜無間隙候由、漸廿四日朝面会、種取之儀、及相談候処、長崎奉行所より沙汰無之内ニ、内密にて榊林宗建小兒へ種付連帰りし御事ニ御座候故、他国へ伝播仕候而ハ如何敷候間、彼人相談之上ニて、早速物筋聞合相成候趣、彼是と隙取候、今朝漸種渡ノ御許容相成、今晚大石より痘痂相渡候様ニ相成申候、此一件、良英不一形致心配呉候故、如此相運候事ニ御座候、則此度痂二三片大石より送方相成候間、御試験可被下候、種法ハ天然痘同様、良英よりくはしく可申

上候、膿汁差上度候へ共、種痘致居候小兒、来月朔日膿汁取候時節ニ当申候、先此ノ度ハ天然痘痂計手ニ入れ申候、私事も今八ツ半時此元発足、昼夜通しにて長崎へ参り一日滞留、来月朔日ニハ此元へ帰り、種法等相授り可申候、長崎ニも此節多人数引痘致し居候、鍋島より江府表江御掛合相成、御免迄ハ牛痘種痘ニ取候事不相成候、江府より稟准之上、牛痘種法も御授ケ相成候と申噂ニ御座候、此趣故、長崎にてハ結句痘種難得奉存候、彼地にて是是非得度とは奉存候、先此元ニ而相調、幸甚ノ至御座候、来月朔日、此元ニ而、膿汁及痂手ニ入り次第、昼夜通し□帰国、来月六七日頃ニハ到着可仕候、此度近在より引痘ノ為メ連越候小兒四人、良英方江滞留、今日第一日と申事、痘色形状等、天然痘同様ニ御座候、大抵腕へ五カ所ツ、植付居候……此通りニ御座候、モスト書名其外著述書之通植付候処、□□相発し申候、佐加表牛痘一件御沙汰書、別紙ニ相写差上申候、此度之内命ハ甚以重任ニて、案外之処、先々都合よろしく大安心仕居候、当表若殿様も一昨日御植え付被仰付候由也

研蔵

八月廿五日八ツ時相認

周弼様<sup>⑤</sup>

これによると、研蔵は、まず、佐賀に向かい、八月二十四日の朝、佐賀藩の蘭方医大石良英に面会していることがわかる。良英とは伊東玄朴の塾で同門であったことから、長崎及び佐賀藩での牛痘種痘の状況や、痘苗の入手方法などについて、事前に情報を得ようとしたのである。佐賀藩で実施されている種痘の痘苗は、善感した榊林宗建の三男を良英が内密に連れ帰り、その後世子に移して普及させたものであった。このため、佐賀藩は、他藩への痘苗の譲渡には慎重な姿勢を示していた。当初、同地での痘苗の入手は困難であるかに見えた。しかし、良英の斡旋により、研蔵は、同日の夕方には、痘痂の分与を許可されることとなった。

彼は、兄周弼に対して、翌二十五日の午後三時に佐賀を出発して長崎に向かい、一日滞在した後、再び、九月一日には佐賀へ戻る予定であることを報告している。佐賀での再度の逗留は、牛痘種痘の接種方法の習得とともに、痘漿と痘痂を手にするためであった。さらに、同報告には、入手次第、速効で帰萩の準備をし、同月六、七日頃には到着できると述べられている。九月十一日に藩主敬親が江戸参勤のため萩城を出発していることから、おそらく、研蔵は、その前に復命しようと考えていたものと推定される。

このように、モニッケによる長崎での牛痘種痘の成功後、二カ月余にして、長州藩に痘苗がもたらされたことがわかる。なお、当時、研蔵への痘苗の譲渡が、佐賀藩による特別の取り計らいであったことは、兄周弼が江戸の藩政府に当てた次の書からもうかがい知ることができよう。

牛痘種之儀ニ付、養子研蔵長崎江被差越、過ル廿一日帰着、肥前佐賀表ニおめて御医師大石良英相對所望仕候趣承候処、牛痘種ハ官物之儀ニ付、自己之了簡ニも難及、内々御役向申入候処、御問柄之儀ニ付、十分御渡方被致候様差図有之、取計相成候次第第二御座候、右ハ肥前守様御内聞ニも及候半之様ニも相聞へ申候、万一御挨拶被仰越候儀も可有御座哉と奉存候付、右之趣申出候間、宜御詮議被仰付候様奉存候事

九月

青木周弼<sup>⑥</sup>

研蔵は、再び萩を発し、長崎へ向かった。以後の様子は不詳であるが、おそらく良英の下にも留まり、牛痘種痘法の更なる習得や情報収集に励んだものと思われる。前掲史料にあるように、研蔵が萩に戻ったのは、九月二十一日であった。

## ② 引痘掛の任命と種痘の開始

藩主敬親は、江戸参勤に先立ち、同嘉永二年（一八四九）九月九日、次のような体制で牛痘種痘の実施準備に当たることを許可した。

一 牛痘一件、差掛り御用有之節、御留守中之儀は、御当職所申出候様被仰付候事

一 引種取計之儀は、青木周弼父子、赤川玄悦、久坂玄機江被仰付、能美洞庵江申合候様被仰付候事

一 引痘場所之儀は、医学所被仰付候事<sup>⑦</sup>

これによると、種痘に関する政務については国元の当職所が責任を持つこと、その実務は済生堂の会頭役赤川玄悦・青木周弼、都講役久坂玄機が担当すること、種痘の接種場所は済生堂内とすることとなっている。能美洞庵は、御側医の筆頭であったため、本道医久坂文中、針医河村養信、外科医佐分利良哲の侍医等とともに敬親に随従し、江戸へ向かうこととなった。これに伴い、以後、長州藩における牛痘種痘法の実施準備は、赤川玄悦・青木周弼・久坂玄機の三人の引痘掛により進められることとなった。同月、引痘掛は、当職所へ次のように書を致した。

内演説

此度牛痘種御取寄被仰付候ニ付、於御当地追々植付相試申候処、唐西洋書籍中ニ相述候通、初発より収切迄、形色順序等少しも相違無御座候、此趣ニ候へハ、最早種苗陸續植付相成可申哉と奉存候、右ニ付、左之通申出候間、宜御沙汰可被下候候<sup>⑧</sup>

彼等は、青木研蔵が大石良英の斡旋で持ち帰った痘苗を用い、漢・洋書籍を参考にしながら接種を試していたのである。この経験を基に彼等が提案した種痘実施要項は、次の一〇カ条であった。

一 牛痘之儀ハ、至而輕安、別狀無之者ニ而、厚き御主意筋之所、

萩内行届候様、御内触被差出可被下候、願出度者有之候ハ、私共三人迄申出候様被仰付可被下候事

- 一 引痘之儀、於端々私二引痘致候者有之候哉二相聞き候、是以仁政府之一端御座候へハ差留候儀ハ無之候へ共、忝人何位と直段相定メ、余分之謝儀を受ケ候趣ニも御座候哉承及申候、第一御主意筋にも不相叶、終ニ医道之本意を失候様二相成、歎ケ敷事ニ奉存候、於医学館経験之上、在々之儀も追而いか様とも被仰付可被下候、其内ハ妄り之儀無之様、向々御沙汰可被下候事
- 一 医学館御貸渡之儀、兼而御沙汰御座候ニ付、来月二日より御仕向被仰付可被下候事

- 一 引痘之儀ハ、多くハ小児を相手致候事故、其場ニ臨ミ啼泣致し、手術相施候事相成兼可申候、其間為安撫菓子類被差出可被下候、左候へハ其煩無之様相成可申哉と奉存候事

- 一 引痘之儀ハ、多人数ニ相成候而ハ手数も掛り、私とも三人ニ而ハ行届不申、其上医学館根之御用事も有之候儀ニ付、先達而申出候通、増人数被仰付可被下候事

- 一 痘瘡中、食禁一人ツ、江申聞候様ニも相成不申、別紙之通、上本被仰付可被下候事

- 一 引痘ハ、四日振と相定、出勤被仰付可被下候事

- 一 引痘日諸用之儀有之候間、早朝より小遣兩人被差出可被下候事

- 一 紙類入用之儀も御座候間、申出候ハ、被差出被被下候事

- 一 引痘之儀ハ、種苗、連綿不絶様相成候儀、肝要之事ニ御座候へハ、一同ニ多人数と申事ハ難相成候、引痘日一日何人と相定メ、切符を以、取計被仰付可被下候事<sup>⑩</sup>

これは、①牛痘種痘の施術に関しては、危惧を要する点はないため、まず、萩城下から接種を行うこと、②諸郡での接種は、萩種痘所での実施状況を見て、追々通達すること、この間、私的な接種及び、高料金の

接種を禁止すること、③医学所済生堂内の種痘所での接種は、十月二日から開始すること、④接種対象者の多くは、幼児であるため、菓子類を用意すること、⑤多人数に実施するため、現在の引痘掛三人では手不足であり、掛員を増員する必要があること、⑥接種後の食事には注意を要するため、食禁一覧表を配布すること、⑦掛員は、四日ごとに出勤して施術を行うこと、⑧掛員が接種日に諸用がある場合は、手伝い要員として二人を用意すること、⑨紙類が必要な場合には申し出るため、これを与えてほしいこと、⑩一度に多人数に対して接種することは困難であるため、一日に受け入れる人数を定め、対象者には切符を与えることにするということであった。当職所では、当職用談役の児玉三左衛門、当職右筆の三宅忠左衛門等<sup>⑪</sup>が中心となつて、各条項について審議し、いずれの内容も認めるという結論を下した。そこで、各条項に附箋を付し、江戸の当役所の見解を求めることとした。便宜上、括弧を付し対応する条項を示しておく。

本書申出通沙汰可被仰付哉<sup>①</sup>

本書諸郡在々ニ而、万一引痘取計候者も可有之ニ付、妄之儀無之様、

御代官江及授置候、追而は内意触をも可被仰付哉<sup>②</sup>

本書以下二廉、申出之通可致其沙汰候<sup>③④</sup>

本書増人数被仰付儀候ハ、人柄御詮議之上可被仰付哉<sup>⑤</sup>

本書以下五廉、申出之通可致其沙汰候<sup>⑥⑦⑧⑨⑩</sup>

三左衛門と忠左衛門は、これに書を添え、九月二十五日付で江戸の当役手元役仁保弥右衛門に送付した。これは、次に示す通りである。添書的主旨は、種痘実施要項について早急に詮議して欲しいというものであったが、特に、次の二点について、指示を要求している。即ち、第一点目は、「売痘之風来人」「売痘之者」への対応についてである。当面、萩においても、諸郡においても、これを禁止するよう命じているが、今後の対応はいかにすればよいかというものである。第二点目は、実施要

項第五条の掛員の増員についてである。この件については、藩主敬親の在国中に既に認められている。しかし、この増員の後、さらに手不足である場合には、漸次、二、三人ずつ増やしていきたいが、これについては認められるかというものであった。

御発駕前被仰伝置候牛痘一件二付、別紙之通、赤川玄悦其外より申出候付、差向於爰許取計相成、廉々ハ別紙別紙之趣を以、伊予殿申達可致御沙汰候処、国中屹度御沙汰無之事二付、御主意筋於地方不相分、押而其沙汰難相成廉々も有之候付、別紙差登申候付、早々御詮議相成御沙汰之趣被仰下候様ニと存候、然処御承知之通、先達而売痘之風来人罷越、其節ハ御授を以被差留候処、其後も一人罷越候付、周弼より趣申出、是又早速差留候得共、右体之儀ニ付、諸郡在々ニ至候而ハ、万一妄之儀も可有之哉二付、御代官中江其段申聞、若売痘之者も有之候ハ、早速差留候様相授置候、右等之儀ニ付而ハ、内意触をも可被差出之処、其元之御詮議筋篤と不致承知而ハ、御沙汰も難相成、依之先断之通取計置申候、且又、此節種痘植付相成、両三人熟痘ニ相成候由、只今之向ニ御座候ハ、追々被相行、御主意筋行届候様可有之、就而ハ別紙ニ相見候通、玄悦其外両三人ニ而ハ行届兼候付、増人数之儀、申出候処、右ハ御発駕前被仰聞置候趣も有之候付、其元より御沙汰相成候儀と存候、然とも万一引痘多人数ニ相成、懸り人数計ニ而ハ手張候様ニも有之候ハ、其節ニ至り暫時掛りニ而も両三人致沙汰可置候間、旁右様御承知何分之儀、御急答ニ被仰下候様ニと存候、此段得御意候様伊予殿被申付候<sup>13</sup>

同書に対して、弥右衛門は、十月十六日付の返書で当役浦鞆負の見解を次のように伝えている。

御書面之通致承知、鞆負殿申達候処、別紙内演説江於其元別紙相成候通ニ而可然との事ニ御座候、尤右之内、引痘多人数ニ相成候而ハ、手数も掛り候付、玄悦其外三人ニ而ハ行届不申二付、増人数之儀申

出有之候得共、多人数ニ相成候よりハ、先是迄之人数ニ而被相済度、弥手張候儀も有之候ハ、周弼江被仰聞、人柄詮議之上、申出候様可被仰付候、願くハ、御七医之内可然様相聞候、且又、食禁等一人宛江申聞候様ニも不相成、別紙之通、上木被仰付候様申出有之候へとも、右ハ肥前様引痘方之分ニ付、御国之風土も有之事ニ付、能美洞庵より周弼江可申越候付、委敷詮議仕申出候ハ、上木被仰付候様ニと存候、旁之趣可及御答様、鞆負殿被申付如此御座候<sup>14</sup>

ここには、一〇カ条の種痘実施要項については概ね認めるとある。ただし、掛員の増員については、その人選を周弼に一任するもの、できるならば侍医から対象者を選ぶよう望んでいること、別紙の食禁一覧表については、佐賀藩の引痘方が作成したものであるため、長州藩に即した内容となるよう検討することとしている。後者については、江戸の能美洞庵から青木周弼に伝えると述べられている。売痘の一件については、ここには触れられていない。

さて、種痘所は、当初、十月二日から開所する予定であったが、希望者が多数であったため、現員の引痘掛三人では対処できないことは目に見えていた。従って、接種の実施は、補助員を増員するまで、見合われることとなった。同月五日、赤川玄成・竹田庸伯・曾祢玄育・長野文琢・佐方玄琳・烏田良俗・松村太伸の七人の任命があった。これを受け、種痘所では、同月九日より接種を開始した。「密局日乗」の同日の条に、

十月九日 晴

一 今日明倫館医学所ニおいて引痘致候付、切符渡置候者、凡二十人程有之候由

と見えるように、初回の種痘者は二〇人前後であったようである。以後、希望者は続々と増え、十三日には善感者五〇人を数えた。こうした種痘所の開設前後の状況について、当職所員の児玉三左衛門と三宅忠左衛門は、十月十三日付で江戸の当役所員仁保弥右衛門に書を送り、詳しく報

じている。次に示しておこう。

牛痘追々引種相成候処、日二増、多人数二相成、掛り人数計二而ハ、手数行届兼候由ニ而、別紙之面々、御用掛り被仰付被下候様ニと、赤川玄悦其外より申出候、右二付而ハ、先得御意置候差向所伊予殿申達、赤川玄成其外いづれも、引種御用暫時取計被仰付候段、過五日御沙汰相成申候、尤別紙名前之内、玄成、庸伯、玄育、良岱、太中儀ハ、御用掛被仰付候様、先達而申入有之由候処、文琢、玄琳儀ハ、其儀無御座候へ共、玄成其外共同様之御詮議ニ被仰付被下候様ニと申出候、右二付而ハ、能美洞庵江赤川玄悦其外より委細申越候由御座候間、猶又、御詮議相成何分之儀被仰下候ニと存候、此段各様迄得御意候様被仰付候由、端書ニ、過ル二日より、医学館引種相成苦ニ御座候処、本文之御用掛り、増人数御沙汰不相成内ハ、手数行届兼、御場所罷出候様難被仰付由ニ而、過ル九日より於医学館取計申候処、引種相願候者、別而多人数ニ相成申候処、只今ニ而熟痘ニ相成順能相済候者五拾人位も可有之かと申事ニ御座候、植え付け候而ハ、間々物成不申部も有之哉ニ相聞候得とも、一向仕損しハ無之由御座候、委細洞庵より可被成御承知と存候へ共、御案しも可有之ニ付、都合之処得御意候<sup>15)</sup>

### ③諸士・卒、及びその家族への種痘奨励の布達

萩種痘所での接種の成功により、藩主敬親は、早急にこれを藩内へ普及させる必要性を認め、同嘉永二年（一八四九）十一月十一日、「御家来中末々」への種痘奨励の布達を裁許した。これは、諸士・卒、並びにその家族に対して、種痘所での接種を受ける場合には、引痘掛に申告して切符（種痘票）を受け取り、指定日に同所へ出向くこと、接種の順番は、「不拘階級、当日罷出候面着順」とすること、老中以上、諸士の家

族のうち一四歳以上の女性についてのみ、自宅での接種を許可することなどを内容とするものであった。同月十三日に、組支配中に布達が下されている。なお、翌十四日には、諸郡に対して、追って通達するまで軽率に実施することのないよう告知がなされた。

諸人痘瘡相煩、難儀せしめ動すれハ、難症ニ而非命之死に陥り候者、間々有之候付、多年上深く御苦勞被思召候処、先般於長崎牛痘引種相成、右種を以種付候へハ、痘瘡多くは相免かれ、殊ニ牛痘は輕安別条無之もの、由ニ付、御國中相広まり候様ニとの御主意を以、此度從彼地、痘種御取寄被仰付、御家来中末々ニ至まで願出次第、医学館ニおいて種付可被仰付との御事に付、左之通被仰付候事

一 種付相願候者は、赤川玄悦、青木周彌、久坂玄機其外掛り之面々迄申出候ハ、引種日限相定、切符渡方可被仰付候事

但、切符渡方被仰付候面々之内、俄ニ差支、又気分相等にて、引種当日不得罷出候ハ、其段前日又は当日早朝迄ニ掛り之向江、切符可差返候事

一 引痘之儀、御家来中末々迄、不拘階級、当日罷出候面着順を以、種付被仰付候事

一 種苗永続肝要之事ニ付、大人小兒ともニ、種付当日より八日目医学館罷出、取膿被仰付候条、万一気分相等ニ而、不得罷出候ハ、見合医師より之容体付、可相届候事

一 老中以上之儀は、医学館罷出候様被仰付候而は、差湊も可有之ニ付、掛り之医師自宅相招、種付相頼度候ハ、前廉掛り之面々迄申入、日限相定可被申請候事

但、自宅相招候とも、会釈ケ間敷儀、堅被差留候事  
一 諸士中拾四歳以上之女子同断、其外自宅相招候儀、堅被差留候事

但、同断



右引種之儀は、厚キ思召を以、掛り之面々被仰付置候事ニ付、右之外妄ニ取扱候儀、堅く被差留候、尤諸郡在々辺鄙之者、引痘之儀は、追々何分之沙汰可被仰付候間、其内妄之儀無之様、万一如何之儀令出来候而は、御主意筋に不相協事候条、此段心得違無之様との御事  
右之通組支配中江も内意可相達候<sup>(16)</sup>

#### ④諸郡種痘法の制定

一方、萩種痘所での接種が軌道に乗ると、引痘掛は、直ぐさま、諸郡での種痘の実施に向けて検討を始めた。長州藩では、一代官が管轄する区域を「宰判」と称した。宰判は、郡と同意である。幕末期には、大島・上関・熊毛・都濃・奥山代・前山代・徳地・山口・三田尻・小郡・舟木・吉田・美祿・先大津・前大津・当島・奥阿武・浜崎の一八宰判が存在した。諸郡への種痘の実施とは、まさにこの一八宰判を対象としたものであった。各宰判の配置については次に掲げる「藩・宰判支配図」を参照されたい。

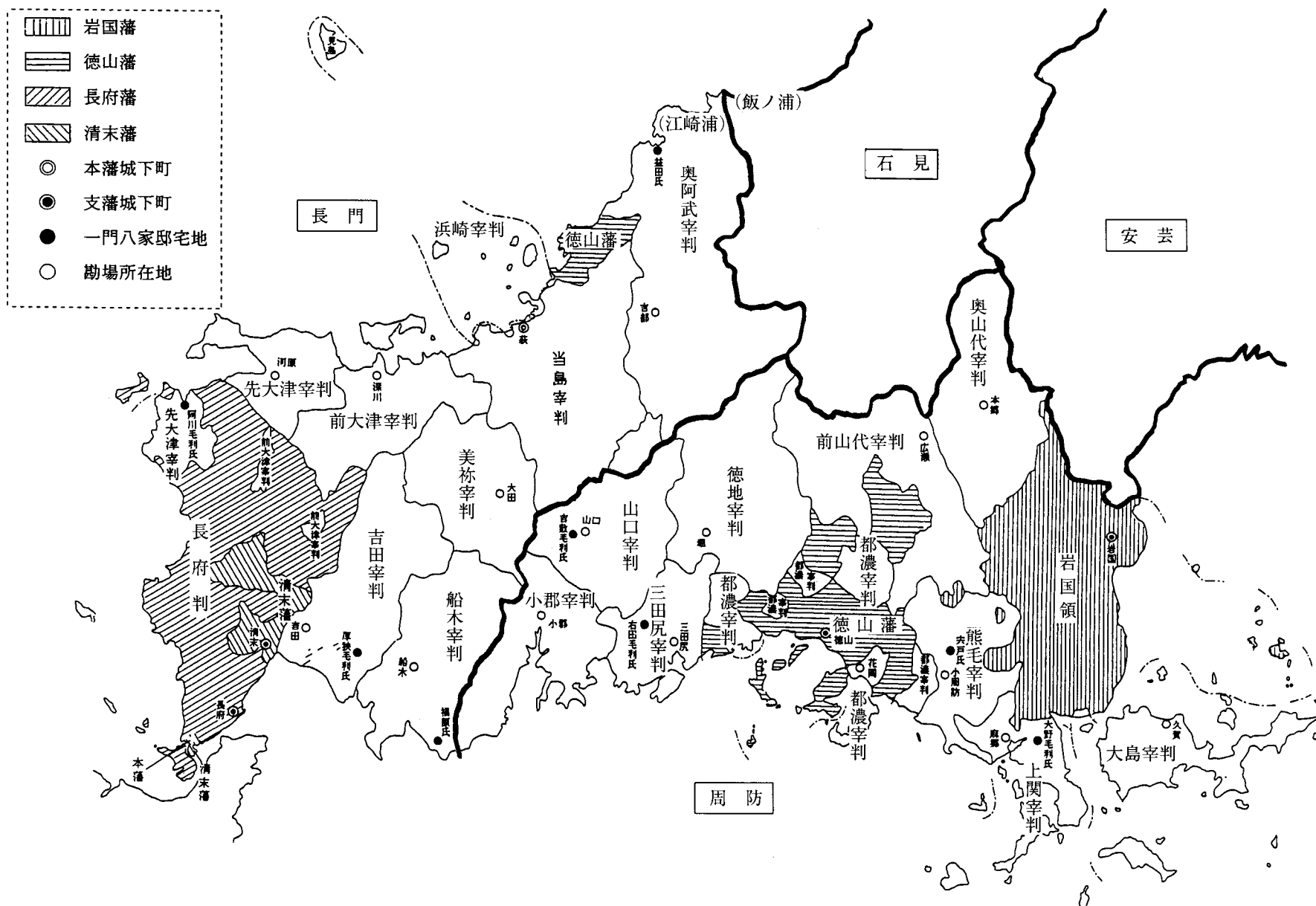
以下、ここでは、諸郡種痘の制が成立に至る過程を見ていきたい。同嘉永二年（一八四九）十月（日不詳）、引痘方は、当職所へ次のような原案を示している。これは、各宰判ごとに医師二、三人を選抜し、まずは、その医師を種痘所に召集して、接種の実技指導を開始するというものであった。同書には、牛痘種痘法の普及こそ「生民御救之一大御美事」であり、まさに「医家之本意にも相叶申候事」とする彼等の自負をうかがうことができる。併せて、「窮邑遠郷迄も、手広伝播可仕」という彼等の意気込みも看取できる。

此度厚き思召を以、牛痘種御取寄被仰付、既に於御城下追々引種被仰付候所、痘苗初発より終切まで、逐一唐土西洋等書中申述候通、少も相違無之、皆々感歎罷居候、此趣に候得は、後來天行痘相免れ

候段、自然無疑事ニも可有御座歟、生民御救之一大美事、且ハ医家之本意にも相叶申候事と奉存候、此上ハ、何卒御國中一統御広メ被仰付度奉願候、但在方引痘之儀ハ、一群内医生両三人宛、御撰挙を以取計方被仰付、右之者共、一先萩表被差出候ハ、於医学館現痘人鑑視申付、御主意筋猶秘訣等申聞せ度奉存候、然は追々窮邑遠郷迄も手広伝播可仕、実以無限御仁恵之御事と奉存候、此段宜御詮議被仰付可被下候事<sup>(17)</sup>

当職所ではこれを原案として認めた。同十月二十四日、次に示すように、当職用該役の児玉三左衛門と当職右筆役の三宅忠左衛門は、当役手元役の仁保弥右衛門に書を送り、併せて引痘方の書付を添付した。これは、原案に関する江戸当役所の意向を確認するためであった。このとき、彼等は、次の二点を付け加え許可を求めている。第一点目は、二つの案件について、即ち、一つは、永代家老益田親施（弾正・越中<sup>(18)</sup>）より、須佐の知行地で痘瘡が流行しているため、家来の医師に種痘の接種方法を習得させたい旨、要望してきていることについて、もう一つは、一門厚狭毛利の当主元美（備前・能登<sup>(19)</sup>）も同様の希望を申告してきていることについてである。これらは急を要するため、即座の許可を求めている。第二点目は、紀伊・肥前の国と同様に、牛痘種痘法に関する洋書を翻訳しこれを出版すれば、諸人の役に立つと考えられるという提案である。その翻訳については、種痘所で実務に当たっている久坂玄機・青木周彌・松村太伸等が内々に済ませているようであると報じている。なお、現在、久坂玄機による翻訳書として「治痘新局」「牛痘纂論」が判明しているものの、出版には至らなかったようである。

追々申進候様、牛痘日増多人数二相成、孰も順能相済、御仁恵之程深く奉感戴一統難有がり、諸郡在々之者迄も、追々承伝へ引種相願候向も有之候由二而、別紙之通、引痘方より申出候付、則差登候間、御詮議相成何分之趣被仰下候ハ、可致其沙汰候、然此節須佐二



藩・宰判支配図

てハ痘瘡致流行、間々仕損候部も有之由ニ付、何とそ家来医之内江引痘伝授被仰付、於領分被相行度、越中殿内存有之、且能登殿ニも領分内相広メ度との申立も有之候処、御発駕前御伝之御様子ニ而ハ、於爰元押而御沙汰も難相成候付、一応及御乞合候、実以御仁惠之程、一日も早く御同中一統ニ行届候様有之度儀御座候、何分之儀御急答被仰下候様ニと存候、且又牛痘種痘之儀、肥前紀州等ニ而ハ、著述之書籍開板相成候由ニ付、於此御方も西洋書翻訳被仰付、一書上木被仰付候ハ、諸人之益ニも可相成歟、於其元ハ官刻も出来可仕候付、手後れニ不相成様、開板被仰付候而ハいか、可有御座哉、玄機、研蔵、太中杯ハもはや内々ハ牛痘書翻訳仕置候様ニも相聞申候、旁之趣御自分様迄得本意候様ニと、伊予殿被申付候付、靱負殿被仰上、御沙汰之趣早々被仰下候様ニと存候<sup>20</sup>これに對して、江戸の弥右衛門は、十一月十三日付で書を返し、次のように当役浦敷負の見解を伝えた。

御面書之通致承知、靱負殿江申達候、先達而も得御意候様、御国中一統行届候様被仰付度儀ニ付、引痘方申出之通、一郡之内医師兩三人充取計被仰付可然候、尤人柄撰拳肝要之儀ニ付、厚く詮議可被仰付候、西洋書翻訳上木之儀も可然との事ニ御座候、乍尔翻訳相調候ハ、爰元差登能美洞庵申合之上、上木被仰付候様ニと存候、猶又、御七医ハ、牛痘一件兼而心得居候様被仰付度候付、莊原芳庵、久坂文中兩人掛り人数ニ被仰付候付、芳庵江ハ於其元其御授可被成候、文中儀ハ於爰許相授可申候、其段玄悦其外江も可被仰聞置候、旁之趣各様迄得御意候様、靱負殿被申付候付、伊予殿江被仰上、其御取計可被成候、先ハ為御答旁如此御座候<sup>21</sup>

即ち、これによると、各宰判においては医師二、三人を選抜し、萩の種痘所で接種の実技を習得させるという引痘掛の原案が認められ、また、牛痘種痘法に関する洋書の翻訳と出版についても、能美洞庵に相談しつ

つ進めるよう指示がなされた。加えて、同書には、侍医について、接種習熟の必要性が強調されている。これは、十月十六日付の返書においてもこだわりを見せていた点であった。この結果、在藩の庄原芳庵と、参勤随從で在府中の久坂文忠の二人が引痘掛の一員として人選された。なお、同返書では、益田親施（弾正・越中）と厚狭の毛利元美（備前・能登）の案件について、その対応を示していない。

十一月（日不詳）、引痘掛は、赤川玄悦・青木周弼・久坂玄機の連名で、諸郡種痘実施案を当職所へ提出した。その冒頭では、

引痘の儀ハ深き思召を以、此度於医学館取行被仰付、追々数人実驗仕候処、天行痘を相防候段、無疑事ニ奉存候、御国中一統渴望仕候趣ニ相聞候、此上ハ一時も早く相広候様ニ被仰付候を、生民普濟之御仁政、下々以有難可奉感仰候、右ニ付而ハ、嚴重ニ御取締方不被仰付候而ハ、自然如何之儀出来仕候程難計、節角難有御主意筋ニ不相協様ニ立行可申奉恐入候、於諸郡取行被仰付候ニ就而ハ、諸事医学館之御仕法通ニ被仰付候様奉存候、氣付之廉々一ツ書を以申出候間、宜敷御僉儀被仰付可被下候<sup>22</sup>と述べ、次のような具体案を示した。

- 一 本書諸郡之儀も、医学館より切符高二て渡方被仰付、戻切符之儀も、於御代官所取縮、医学館江差返候様可被仰付哉
- 一 於諸郡ニ引痘之儀ハ、切符詰めニ可被仰付哉
  - 但、切符之儀ハ、医学館より差出候様可被仰付候、猶戻切符は厳密相調へ、医学館江差返候様被仰付候ハ、自然と取り締まりも相成可申と奉存候事
  - 一 面着差出候様ニ可被仰付哉
    - 但、面着中江ハ、姓名、年齢、引痘之点数、及不感再種其外異症出来候ハ、委敷相記、月末又ハ一季毎ニ調へ候而、御代官所より医学館まで被差出候様可被仰付候事

一 引痘懸り之内より、為取り締まり一年一兩度ツ、廻郡可被仰付哉

一 諸郡より御撰拳之医生、萩表滞留被仰付、医学館罷出、現痘人鑑視申付、罷帰候節、苗種相渡し、猶御規則及秘訣等申聞せ候様可被仰付哉

一 引種場所其外之儀ハ、於御代官所御詮議之上申出候様可被仰付哉<sup>(23)</sup>

これは、①一宰判毎に、陪臣医並びに地下医の中から引痘掛として四五人を選抜すること、②諸郡でも、種痘の接種を受ける際には、医学所済生堂が発行した切符（種痘票）を必要とすること、都合により、接種を受けなかった場合には、これを必ず済生堂へ返すこと、③接種を受けた者については、代官所が名簿を作成し、姓名・年齢・接種の点数・その後の経過などを詳細に記録すること、代官所は、これを一月ごとまたは一季ごとに整理して、済生堂に提出すること、④諸郡の状況を把握するため、一年に一・二度の割合で、萩種痘所の引痘掛を遣わすこと、⑤諸郡から選抜された医師は、萩城下に滞在し、種痘所で実地に接種方法を習得すること、帰郷の折りに種痘所から痘苗を受け取り持ち帰ること、⑥接種場所等の選定についても、代官所がこれを差配すること、施行に先立ちこれを済生堂に報告することというものであった。当職所では、当職用談役の児玉三左衛門、当職右筆の三宅忠左衛門と石川十左右衛門、右筆添役の山県右平等が中心となって、各条項について審議し、次のような修正意見をまとめ、これに附箋を付し、江戸の当役所の意見を求めることとした。便宜上、括弧を付し対応する条項を示しておく。

- 一 本書一宰判二而功者医師両三人充、懸り二可被仰付哉<sup>(1)</sup>
- 一 本書諸郡之儀も、医学館より切符高二て渡方被仰付、戻切符之儀も、於代官所取縮、医学館江差し返し候様可被仰付哉<sup>(2)</sup>
- 一 本書之通可被仰付哉<sup>(3)</sup>

一 本書追々詮議之上、何分之沙汰可被仰付哉議<sup>(4)</sup>

一 本書之通可被仰付哉、尤種苗之儀ハ、在方苗種より小児連出被仰付、引種感し候様相極候上連帰、其種を以追々種付け候様可被仰付哉<sup>(5)</sup>

一 本書之通可被仰付哉<sup>(6)</sup>

これは、③と⑥については実施案の通りとすること、それ以外については、①諸郡が選抜する引痘掛は二・三人とすること、②済生堂が発行する切符（種痘票）を都合により使用しなかった場合にも、代官所が取りまとめ、済生堂に返却すること、④萩種痘所引痘掛による諸郡取り締まりについては、詮議の上、追って沙汰を下すこと、⑤痘苗については、帰郷の際に種痘所から受け取りこれを持ち帰るという方法を取らないこと、即ち、各医師が小児を連れて種痘所に向き、その小児が善感したことを確認した後連れ帰り、地方で小児の痘漿を取って普及させることというものであった。三左衛門ら四人は、これに書を添え、十一月二十七日付で江戸の当役手元役仁保弥右衛門、当役右筆副の椋梨藤太に送付した。次に示す通りである。添書では、給領主が陪臣への種痘法伝習を要請してきた場合には、国元の当職所の一存で許可する権限を与えて欲しい旨が強調されている。その背景には、同便で送付する岩国支藩の要望<sup>(25)</sup>が許可されると、既にそれより先に要望が出されていた益田親施（弾正・越中）と厚狭の毛利元美（備前・能登）の二つの案件への対応が難しくなるということがあった。この二つの案件は、江戸の当役所からの沙汰がないため宙に浮いた状態となっていたのである。

牛痘引種之儀二付、別紙之通り内意触被仰付候付、致其沙汰候、且又、先達而得御意候諸郡在々迄も被相行度儀、追便何分可被仰下、仕法建之儀、猶又、別紙之通、赤川玄悦其外より申出候付、刎紙之通り可被仰付哉、靱負殿被仰上、御答被仰下候様二と存候、此段得御意候様二との儀二付、如是御座候由、端書二、以別紙得御意候通

り、岩国得引種被差免候付而ハ、先達而申進候能登殿越中殿より之被申立、其元より之御返答有之候迄、差延候様ニも取計苦敷、且其外大家之衆より申立も可有之、左候ハ、被相願次第、追々被差免に而可有之候、尤諸郡之内ニも、当節痘瘡致流行候所も有之哉二相聞候付、猶予難相成場所も可有之歟、夫等之部は御答不被仰下内、御沙汰相成儀も可有之、仕法建之都合は玄悦其外より之氣付筋之趣を以、可及取計候間、旁右様御承知被置被下候<sup>(26)</sup>

同書に対して、江戸の弥右衛門等は、十二月十五日付で、

御面書之通、御端書、別紙、旁致承知、靱負殿江申達候処、被仰下候通可然との儀ニ御座候間、別紙差返申候、右為御答如是御座候<sup>(27)</sup>と返書し、引痘掛が作成した原案、三左衛門等による修正案、及び給領主への対応など、いずれにも異議のないことを伝えた。

なお、諸郡種痘実施案の作成・検討が進められていたまさにその最中、十一月（日不詳）には、諸郡において、痘瘡流行の気配を見た代官役等の間で、動揺が起きていた。彼等は、郡別に勘場医・地下医のうちから優秀な医師の氏名を申し出るため、萩種痘所での伝習を許可して欲しいと、郡奉行内藤左兵衛に願ひ出た。

諸人痘瘡相煩、令難儀候者多候二付、今般於長崎牛痘引種相成、御國中相広り候様二との御事二付、諸郡勘場医地下医之内、医療功者之者、郡別より可申出候間、於医学館伝授被仰付、百姓中江も引痘被仰付候様奉願候、医師名前之儀ハ、宰判々々より追而可申出候間、此段宜御詮儀御沙汰可被下候<sup>(28)</sup>

左兵衛は、直ぐさま、これを当職役毛利元潔（伊予・出雲）に伝え、「本書申出之通り、被差免候<sup>(29)</sup>」との許可を得た。これは、諸郡種痘実施の法の制定を前にした十二月七日の指令であった。

嘉永二年十月以来、検討が重ねられてきた諸郡種痘実施案は、原案に修正案を付加し、嘉永三年一月（日不詳）に諸郡種痘の制として成案を

得た。同月十三日、郡奉行内藤左兵衛は、これを諸郡代官役・八幡改方・山城宰判仕組都合役に通達した。次に掲げておこう。

此度於萩牛痘引種被仰付候付、諸郡在々迄行届候様可被仰付との御事二付、左之通被仰付候事

一 一宰判中陪臣地下医之内、功者之者両三人宛、掛り被仰付候て、萩表罷出、於医学館伝授之上、種痘之儀は、在方より小児連出被仰付、引種感し候儀相極候上連れ帰、其種を以種付被仰付候事

但、医師之儀は、御代官所、且給主より付出、人柄撰挙之上、掛り被仰付候て、右掛り之外、引種取扱之儀、堅被差留候事付り宰判より掛り医師之儀、増人数をも可被仰付候事

一 諸宰判給領共二、引種之儀、切符詰二被仰付候て、医学館より切符惣高二而御代官所江請取、掛り之医師江相渡、戻り切符之儀も、御代官所江取縮、医学館江追而差し返候様被仰付候事

但、切符相渡候名前付記、引種姓名、年齢、種点之數、及不感再種其外異症出来候ハ、委細付記、一ヶ月切、御代官所江面着差出、夫より医学館江差出様被仰付候事

一 引種相頼候面々より、医師江之謝礼其外会釈ケ間敷儀、堅差留候事

右之通厚思召を以被仰付事候条、妄之儀無之様、且給領たりとも諸事御代官所より之差図に任せ取計被仰付候段、心得違無之様二との御事

右之通、組支配中江も内意可被相達候事<sup>(30)</sup>

## ⑤ 諸郡種痘法の実施

同嘉永三年（一八五〇）一月、前大津宰判の代官所から、諸郡種痘法

の実施に先立ち、次の五点の伺いが提出されている。

一 医師伝授トして出萩之節、路両旅籠代、其外小児連出等之諸雑費、いか、可被仰付哉之事

一 医師心付等之儀同断

一 但陪臣医も地下医同様可被仰付哉之事

一 引痘取行之節之諸雑費同断

一 切符書方、医学館同様ニ可被仰付哉之事

一 引痘場所之儀、医師於宅方角々々ニて取行ひ可被仰付哉之事<sup>(31)</sup>

二月八日、当職役毛利元潔（伊予）は、次のように回答し、この旨を諸郡に回達した。即ち、その内容は、伝習の際の萩までの旅費、小児を同行する際の諸雑費、医師への心付け、接種にかかわる諸雑費などについては、「先、於御代官所、取替払」とすること、切符（種痘票）への記入方法は、済生堂のそれに従うこと、接種の場所は、担当医の居宅の近辺とすることというものであった。<sup>(32)</sup> なお、同二月、医学所済生堂は、寮舎増築の必要から南苑内に改めて移転し、旧医学稽古場と合併することが決定した。これに伴い、二月十二日、種痘所も南苑の別館に移転した。

日用人

式人

右、引痘方御役所、明十二日、南苑御茶屋江引越被仰付、物々持運御用御座候条、明候朝六ツ半時より罷出候様御沙汰可被仰下以上

二月十一日

引痘方<sup>(33)</sup>

同月十五日、一門八家の給領地及び、諸郡に対して、萩種痘所への医師の派遣が正式に許可された。同日、伝習の開始に当たり、次の三点、即ち、「医学館引痘日承合一両日前、萩罷出」ること、「引痘日両度医学館に罷出候ハ、引痘之始終」を学び、「萩表滞留十日余ニ而帰在」すること、「種苗取帰之儀」については、「其所々々より小児萩表連越、於

表2-1 萩種痘所伝習生一給領主（一門・寄組・大組上層者）の医師一（嘉永3年2月～4年3月）

年	肩書	主家備考	氏名	伺済月日(当職所)	在所
嘉	毛利元統(筑前)家来	一門右田毛利	清水 文圭 石井 文安	2-15 2-15	(三田尻宰判)
	毛利元統(筑前)家来	一門右田毛利	杉山 宗立 秋本 岱寿	2-15 2-15	三田尻宰判
	毛利元美(能登)家来	一門厚狭毛利	栗屋 松伯 大田 研道	2-15 2-15	(吉田宰判)
	毛利元美(能登)家来	一門厚狭毛利	長谷川玄道	2-15	舟木宰判
	毛利元潔(伊予)家来	一門吉敷毛利	波多野養庵 小田 東伯	2-15 2-15	(山口宰判)
永 3	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	江島 玄珪	2-15	美祢宰判
	益田親施(越中)家来	寄組／永代家老	田村 杏庵	2-15	(奥阿武宰判)
	益田元固(七内・伊豆)家来	寄組	岡 明甫 中井 徹斎	2-15	山口宰判
	佐世主殿家来	寄組	木村 玄琢	2-15	先大津宰判
	児玉三郎右衛門(遠江)家来	寄組	福井 文忠	2-15	前大津宰判
	井原源右衛門(豊前)家来	寄組	佐々木立養	2-15	当島宰判
	国司熊之助(信濃)家来	寄組	熊野 玄齡	2-15	(舟木宰判)
	志道隼人(安房)家来	大組	中原 文祐	2-15	吉田宰判

嘉永3	清水清太郎家来	大組／嫡子	片野 三琢	2-15	熊毛宰判
	毛利元蕃(淡路守)家来	徳山支藩主	浅田 文厚	2-15	徳山宰判
	時沢平兵衛(育)	(不 明)	時沢 千哉	2-15	美祢宰判
	益田親施(越中)家来	寄組／永代家老	山科 文圭 仁保 宗謙	2-25 2-25	(奥阿武宰判)
	毛利元潔(伊予)家来	一門吉敷毛利	内藤 道和	2-25	先大津宰判
	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	池田 退蔵 山田 玄餘	2-25 2-25	徳地宰判
	浦鞠負家来	寄組	松村 千祥	2-25	上関宰判
	堅田就正(安房)家来	寄組	村井 道庵	2-25	上関宰判
	粟屋貞之進家来	(不 明)	那須 千庵	2-25	(不 明)
	山内千之允家来	(不 明)	熊谷 尚謙	2-25	当島宰判
	福原親俊(近江)家来	寄組／永代家老	安武 玄德 滝原 省庵	2-28 2-28	(舟木宰判)
	毛利熙頼(隠岐)家来	一門大野毛利	小河内玄恭 松岡 春岱	3-14 3-14	(上関宰判)
	毛利元潔(伊予)家来	一門吉敷毛利	広田 三貞	3-25	小郡宰判
	柳沢備後家来	大組	吉村 祐庵	3-25	(不 明)
	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	小林 玄輪	4-1	(先大津宰判)
	穴戸元礼(孫四郎)家来	一門三丘穴戸	三浦 玄仲 山根 寿庵	4-1 4-1	(熊毛宰判)
	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	緒方 玄禎	5- 不詳	(先大津宰判)
	穴戸元礼(孫四郎)家来	一門三丘穴戸	井本 文恭 白石 周禎	5-20(6-19差除) 5-20(6-19差除)	小郡宰判
	堅田健介(安房)家来	寄組	三好 友益	5-20(6-19差除)	都濃宰判
	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	江田 文禎	6-13	(先大津宰判)
嘉永4	毛利主計(伊勢)家来	一門阿川毛利	蒲生 丹治	(3-13)	(先大津宰判)
	国司熊之助(信濃)家来	寄組	福光 文龍	(3-14)	(舟木宰判)

\* 在地の宰判が不明な場合は、主家の邸宅が属する宰判を( )で付した。

註：「好生堂医学引痘沙汰控」、『萩藩給禄帳』、『もりのしげり』より作成。

表2-2 萩種痘所伝習生

一御本陣医師・御茶屋医師一(嘉永3年)

肩 書	氏 名	伺済月日(当職所)	在 所
御茶屋医	竹田俊貞	2-15	吉田宰判
御本陣医	三戸玄庵	2-15	熊毛宰判
御茶屋医	青木宗悦	2-15	大島宰判
御茶屋医	内藤玄泰	2-15	舟木宰判
御茶屋医	岡 宅治	2-15	小郡宰判
御茶屋医	林 吉作	2-25	山口宰判

註：「好生堂医学引痘沙汰控」より作成。

表2-3 萩種痘所伝習生一御寺医師一(嘉永3年)

肩 書	氏 名	伺済月日(当職所)	在 所
大寧寺家来	大谷玄碩	2-25	先大津宰判
禪昌寺家来	鰐石玄貞	2-25	山 口 宰 判

註：「好生堂医学引痘沙汰控」より作成。

表3 萩種痘所伝習生一勘場医師・地下医師一(嘉永3年2月～嘉永4年3月)

年	肩書	氏名	伺済月日(当職所)	備考
嘉	山代宰判	勘場医 増野 兼安	2-15	
	奥阿武宰判	勘場医 片山 養順 地下医 山本 文靜	2-15 2-15	
	当島宰判	勘場医 真逆 玄達 地下医 田坂 立庵 地下医 増野 宗哲	2-15 2-15 2-15	
	吉田宰判	勘場医 水野 恭安 地下医 中丸 昌賢	2-15 2-15	
	上関宰判	地下医 長尾 良哉	2-15	
	都濃宰判	地下医 有福 道春 地下医 内山 秀岳 地下医 田坂 良助	2-15 2-15 2-15	
	大島宰判	勘場医 青木 三の 地下医 青木 玄朔 地下医 山県 奎助 地下医 二宮 英順	2-15 2-15 2-15 2-15	
	美祢宰判	勘場医 蔵田 泰順	2-15	
	舟木宰判	地下医 梅本 文甫	2-15	3-20萩不出
	小郡宰判	勘場医 平田 英伯 地下医 水野 秀伯	2-15 2-15	
	前大津宰判	勘場医 綾部 玄益 地下医 岩崎 友仙	2-15 2-15	
永	山代宰判	勘場医 松原 玄順 地下医 管谷 文龍 地下医 村尾 養伯 地下医 佐藤 玄卓 地下医 中村 豊治 地下医 長谷 広達	2-25 2-25 2-25 2-25 2-25 2-25	
	熊毛宰判	地下医 石丸 國南 地下医 山田 文友 地下医 手塚 立伯	2-25 2-25 2-25	
	上関宰判	勘場医 志熊 三圭	2-25	
	先大津宰判	勘場医 中原 玄理	2-25	
	徳地宰判	勘場医 山田 玄禎 地下医 三戸 寿庵	2-25 2-25	
	奥阿武宰判	勘場医 藤村 俊貞	3-6	
	舟木宰判	勘場医 野村 俊斎 地下医 伊藤 俊貞	3-20 3-20	
	伊崎新地	地下医 畑 玄淋	3-28	
	見島	地下医 藤村 玄泰	3-25	
	熊毛宰判	地下医 林 宗順	3-25	
	上関宰判	地下医 河内山玄郁	3-25	永安倅
	都濃宰判	地下医 浅海 玄礼	3-25	
3	前山代宰判／大汐村	地下医 石津 環	5-25	行哉次男
	都濃宰判／末武村	地下医 藤田 良育	5-20	6-19差除
	都濃宰判	地下医 手塚 太仲	(6-29)	



嘉永3	大島宰判／小松村	地下医 地下医 地下医	杉原 吾朔 青木 泰淳 長尾 道意	(7-19) (7-19) (7-19)	
	先大津宰判／神田下村	地下医 地下医	岡本 見林 本田 周眠	(7-19) (7-19)	
	吉田宰判	地下医	三沢 玄貞	7-29	
嘉永4	山代宰判	地下医	河村 養元	3-8	
	上関宰判	勘場医	秋元 泰仲	(3-13)	
	当島宰判／木間村	(地下医)	馬田 英迫	3-14	長野玄琢(育)

註：「好生堂医学引痘沙汰控」より作成。

医学館渡方」とすることが確認された。<sup>(34)</sup>

嘉永三年二月から翌嘉永四年三月までに、萩種痘所で伝習許可を受けた者は、

一〇九人に上る。表2―

1・2―2・2―3、及び

表3は、伝習生の出身階層を明らかにするため整理したものである。伝習生の内訳は、給領主（一門・寄組・大組上層者）の医師、いわゆる陪臣医が四六人、御本陣医師・御茶屋医師が六人、御寺医師が二人、勘場医師が<sup>(35)</sup>一五人、地下医師は四〇人であった。階層別に見ると、武士的階層に属する者が五四人、農民的階層に属する者が五五人と、両者はほぼ同数であったことになる。生死を岐ける状況下において、種痘の恩恵は、階層にかかわらず、藩内のすみずみにもたらされたと見ることができよう。更に、二月十五日から晦日

までの間に、伝習許可を受けた者は、武士的階層では五四人中四〇人（七四％）、農民的階層では五五人中三五人（六四％）であった。これにより、諸郡においては、まさに、満を持した状態であったことがわかる。ここに、種痘の迅速な普及をうかがうことができる。

## ⑥藩領域を越えた種痘の承認

この時期、石州地方では痘瘡が大流行していた。ここでは、同地方と隣接する益田親施（弾正・越中）の給領地、前山代宰判・奥阿武宰判での状況を見ておきたい。前掲「藩・支藩支配図」には、これに関連する地名・地域名を付している。

嘉永三年（一八五〇）三月、大森の陣屋や浜田領の益田村から、須佐の益田親施の領内へ、内々に、種痘接種の依頼がなされていた。さらには、萩種痘所での伝習も希望してきたようである。同書は、四月一日に、代官所を通じて当職役毛利元潔（伊予）に提出されたもので、内々に認められている。

牛痘種痘、御国中追々手広被相行、近国ニも承伝、既ニ石州大森御陣屋並浜田御領地益田より、引種之儀、内々須佐領分江相頼来候由、表方萩表江御頼相成候而は、御手数も懸り候儀ニ付、何とそ内々ニ而取扱呉候様との儀御座候間、被任其意、於須佐石州より罷越次第、引種可被仰付哉、尤石州江伝授支度儀ニも候ハ、彼地より医師萩表罷越、医学館ニおいて伝授仕候様可被仰付哉<sup>(36)</sup>

同三年五月十五日には、石州益田村の地下医俵主齡より、須佐の益田親施の家臣萩野忠左衛門へ、次のような種痘伝習の願書が提出された。同書によると、「益田様御旧里」の菩提寺の一つ医光寺が実質的に労を執っていたことがわかる。

口上覚

此度長州於萩表ニ、引痘被為在御取行、御仁恵之御儀と一統難有奉存候、尤他国伝授之儀、御禁製之趣奉承知候、然ル処御先君益田様江御願奉申上候ハ、と、益田一統より御菩提所三ヶ寺江御願申上候処、於同寺ニも、人命相救候儀、尚又私ニおゐても同様之儀、多人數相助り候儀ニ付而は、其段医光寺より須佐表江御願御座候処、他国伝授之儀御願被為下と之御事、格外之御仁計、御旧恩忘却不仕、一統難有仕合ニ奉存候、私儀、浜田領益田地下医ニ御座候、名主土田惣三郎存内ニ罷居申候、此段宜御聞届被下置候様願上げ候以上

石州益田

俵主 齡<sup>(37)</sup>

これは、同月二十日、許可が下されている。<sup>(38)</sup>

翌嘉永四年に入ると、四月十二日付で済生堂に次のような沙汰書が下された。

石州畑ヶ迫

堀藤十郎

右出萩、家内子供等江牛痘種付願之通被差免候事<sup>(39)</sup>

この件に関する経緯は不詳である。しかし、藩当局の正式な許可の下、萩種痘所では、石州地方の地下人及びその家族を受け入れ、接種を行っていたことは確かである。また、同四年四月、山代宰判の地下医松原玄順の下には、痘漿を得るため、同宰判に近接した石州領の地下人から、小児への種痘接種の希望が寄せられていた。山代宰判の代官役は、当初これを受け付けないことにしていたが、地下人からのたつての願いにより、ついに、郡奉行木原源衛門を通じて当職役毛利元統（筑前）に指示を仰いだ。

山代宰判地下医師松原玄順其外江、兼而引痘伝授被仰付置、諸村江追々引痘相調、孰も難有奉感服候、然処先達以来、松原玄順江、石

州領より小児江牛痘引種之儀、度々相願来候由之処、御仕法も有之儀ニ付、再応相断候得共、御隣国殊ニ近里之所柄故、地下人之手寄を以達而相歎候様子、右ニ付、玄順ニおゐても殆込入り、何卒引種被差免被下候様申出候、尤之筋ニ相聞候処、如何可被仰付哉御問申出候間、何分之趣被仰授可被下候、且又、被差免候ハ、地下人同様、広瀬村ニおゐる、切符相渡引種相調、御菓子等も被下候而可有之哉、旁之趣被遂御詮議御沙汰可被下候以上<sup>(40)</sup>

これに対して、五月四日には、

本書石州領之者罷越、引痘相願候ハ、勝手次第種付被差免、御菓子をも被下候事

但、種付相願候者より、万一内勤等之仕向有之候共、一切引受被差留候段、於代官所時々氣を付候様被仰付候事<sup>(41)</sup>

と沙汰が下され、許可の旨が達せられた。ただし、小児の同行者等がこれを機に「内勤」を希望しても、決して引き受けることのないような念が押された。さらに、同年六月には、奥阿武宰判の代官所から次のような伺書が提出されている。

右之通御沙汰可被仰付哉

但、石州領之者江、追々種付被差免候先例御座候

奥阿武郡江崎浦御用医山本文静江も、先達而引痘伝授被仰付、近村江引痘仕候候処、孰も難有奉感入、右之趣、石州飯ノ浦其外より聞伝、追々文静江小児江引痘之儀、度々相願来候、然処御仕法有之儀ニ付、再応相断候得共、御隣国別而程近之場所ニ而、兼而療養被相頼候、先方も有之類ニ御願申上呉候様相歎候、津和野近くハ、片山泰順江御免被仰付候得共、彼地をは余程相隔居候、文静も人情ニ而難捨置込み入候付、偏御隣縣を以引痘御免被仰付候様願書候、左候ハ、種切々にも不相成、旁之趣尤之儀と相聞候、如何可被仰付哉御問申出候間、何分之趣被仰

授可被下候、被差免候ハ、地下人同様、於江崎浦切符相渡、引種罷越候節、御菓子等も被下二而可有之哉、且又、面着之儀も地下人と付交、一帳ニして差出せ可申哉、旁之趣被遂御詮議御沙汰可被下候以上<sup>(42)</sup>

これは、奥阿武宰判江崎浦の山本文静が石州領飯ノ浦近辺の小児へ痘接種を行うことについて、事実上、許可を求めたものであった。冒頭に「先例」が強調されているように、この伺いは、先の山代宰判への措置内容を十分に把握した上で作成されたものであることがわかる。これに対して、七月四日、

本書願之通被差免、取扱等之儀、地下人同様被仰付候事

但、不感異症出来ハ自然之事ニ而、不及力儀とハ乍申、扱之鹿略

よりと他領之者存入等有之候而は不可然候付、諸事叮嚀ニ取扱、

且又、勤向等之儀、一切引請不申様、旁御代官所より時々氣を付

候様被仰付候事<sup>(43)</sup>

との沙汰が下され、許可されることとなった。なお、こうした他領の者への寛容な対応は、仮に接種に失敗した場合、リスクを伴うこととなる。つまり、技術的に未熟であるという誤った認識を広めることになるからである。そのため、不感を避けるためにも、丁寧に痘接種を行うよう指示がなされている。

## 7 諸郡種痘法の改訂

同嘉永四年五月（日不詳）、諸郡種痘の制が一部改められることとなった。今後、新たに種痘医を必要とする際の処し方について、変更が加えられたのである。

思召を以、諸郡在々迄、小児江牛痘種付被仰付、初発之儀二付、御仕法嚴重不被仰付而は、猥之儀出来可仕哉と、地下医其外出萩、於

好生館引痘伝授被仰付、追々取行候処、諸郡之内、当時伝授仕居候医師二而は、相整兼候由二而、人数増之儀、相願候宰判も有之、且追々伝授仕候医師病氣其外二而差湊候節は、別人江伝授之儀、相願候宰判も可有之候処、是迄之通出萩被仰付、於好生館伝授仕候様二而ハ、往々諸雜費不容易事二付、万一人数増、且入代り等有之節は、其段明倫館御用所申出御聞届之上、於其宰判引痘功者之医師より伝授を受候様被仰付候、尤引請之御代官又は御勘定役等出郡之節、於勘場見届伝授仕、且是迄之御仕法通、限之儀不仕段、本人江請狀申付、明倫館御用所江差出候様被仰付候事<sup>(44)</sup>

これにより、新規に種痘の接種技術を習得する場合には、従前のように、萩種痘所に向いて伝習を受けることなく、郡内の既習の伝習医の下で学ぶことが可能となった。ただし、種痘医を増員する場合にも、現種痘医との交替をする場合にも、明倫館御用所へ申し出ることが義務付けられた。こうした変更の背景には、地下医の出萩の際の経費を削減し負担を軽減するという、現実的に対処しなければならぬ問題があった。同時に、次の点を看過することはできない。即ち、この時期には、既に、諸郡において種痘が普及しており、その技術的な側面においても、各郡内で十分に伝習できる程に安定・向上していたという点である。

このように、牛痘種痘法の普及には、能美洞庵や青木周弼以下の引痘掛が寄与するところ大であった。藩主敬親は、彼等の功勞に対して、次のように賞与した。<sup>(45)</sup> 同年六月、洞庵は、「野相召下夏御羽織」を贈られ、青木周弼は、手廻組に列せられ、永世禄二五俵を支給されることとなった。周弼は、これをもって譜代藩医に取り立てられたのである。同年七月には、「厚キ御主意を以、引痘掛被仰付候処、御國中端々まで御仁恵行届、御大慶之事二候而ハ、初発より能美洞庵申合、心配遂苦勞候段、神妙被思召候、依之格別之筋を以、右之通り拝領被仰付候事」として、赤川玄悦・久坂玄機・青木研蔵に、それぞれ銀子二枚が与えられた。さ

らに、赤川玄成・竹田庸伯・曾祢玄育・長野文琢・佐方玄琳・烏田良岱・庄原芳庵・久坂文中の八人には、それぞれ金三〇〇正が、松村太仲には金二〇〇正が与えられた。なお、同月、河村養信が種痘用掛に任じられている。

### むすび

ここでは、以上明らかにした諸事実を総括し、今後に残された課題を述べておきたい。

長州藩にモーニッケ苗がもたらされたのは、嘉永二年（一八四九）九月六、七日頃であった。モーニッケによる長崎での牛痘種痘の成功後、二カ月余であったことがわかる。こうした速やかな対応を可能にした要因は、青木周弼の情報網と、その弟青木研蔵の佐賀藩での人脈に求められる。その後、藩主毛利敬親の江戸参勤に伴い、種痘に関する政務については、国元の当職所が責任を負うこととなった。また、このとき、種痘所の設置場所は医学所済生堂内と決定した。実施に向けての準備は、引痘掛に任命された赤川・青木・久坂を中心に進められた。三人はいずれも、済生堂の責任者として会頭役を勤める者等であった。彼等は、青木研蔵が佐賀藩から持ち帰った痘苗を用い、漢・洋書籍を参考にしながら、早々に接種を試み成功を収めた。この経験を基に、彼等は、種痘実施要項一〇カ条を作成し、当職所に提出した。この実施要項は、そのまま許可となり、十月二日から、種痘所で接種が開始されることとなった。しかし、当日には、三人では対処できないほどの多数の希望者が殺到したため、いったん開所を見送った。同月五日、赤川・竹田・曾祢・長野・佐方・烏田・松村の七人が補助員として動員され、同月九日に至り、ようやく接種が開始されることとなった。藩主敬親は、種痘所での安定的な実施状況に関する報告を受け、早急にこれを藩内に普及させる必要性

を認め、十一月十一日には、藩内諸士・卒、並びにその家族に種痘奨励の布達を下した。

一方、種痘所での接種が軌道に乗ると、引痘掛は、直ぐさま諸郡での種痘の実施に向けて検討を始め、六カ条の諸郡種痘実施案を当職所に提出した。これを受け、当職所と江戸の当役所の間で、二往復の書のやりとりがなされ、原案について詳細な検討が加えられた後、ようやく、翌嘉永三年一月に成案を得た。これは、種痘の接種技術については、各宰判毎に医師を二、三人選抜し、萩の種痘所に派遣すること、痘苗については、各医師が小児を連れて萩種痘所に向き、地方で小児の痘漿を取って普及することなどを内容とするものであった。同月十三日には、諸郡の代官役に通達されている。二月十五日には、諸郡から選抜された医師に対して、萩種痘所での伝習が許可された。ただし、これに先行して、実際には、前年の十二月七日より、萩種痘所では、諸郡の代官役からの強い要望に応え、既に医師への伝習が始められていた。このことは看過できない事実といえよう。以後、萩種痘所での伝習許可を受けた者は、嘉永四年三月までの一年余りで、一〇九人に上っている。階層別に見ると、武士的階層が五四人、農民的階層が五五人と、両者はほぼ同数であった。生死を岐げる状況下において、藩内のすみずみに種痘の恩恵がもたらされたと推測できる。さらに、二月十五日から晦日までの間に、伝習許可を受けた者は、武士的階層ではその七四％（五四人中四〇人）、農民的階層では六四％（五五人中三五人）を占めた。種痘の普及は、急速なものであったことがわかる。同四年五月には、諸郡種痘の制が一部改められることとなった。これにより、諸郡において新たに種痘医を必要とする場合には、萩種痘所に向いて伝習を受ける必要はなく、郡内の既習の伝習医の下で伝習することとなった。既に、この時期、諸郡においては、種痘が一般化しており、痘児の継続的な確保も適い、技術的側面においても各郡内で伝習できる程に安定・向上していたことが推測

できる。

なお、この時期、石州地方では痘瘡が大流行していた。このため、山代宰判・奥阿武宰判・須佐の益田親施の知行地においては、同地域と隣接する石州地方の地下人や地下医から、萩種痘所での伝習の仲介や、小児への種痘接種の依頼がなされていた。同地域の代官役等は、萩の当職所に指示を仰ぎ、許可を得た後、依頼に応じている。これについては、藩当局も寛容な態度を示し、不感を避けるため、丁寧に接種を行うよう指示を与えている程である。また、萩種痘所では、藩当局の正式な許可の下、石州地方から地下人及びその家族を受け入れ、接種を行っていた。以上、長州藩における牛痘種痘法の導入・実施及び、普及の過程について、基本的な諸事実を明らかにした。しかし、これは、史料の性格上、政策としての藩のスタンスを把握したに過ぎない。諸郡への種痘の急速な普及については、藩の政策とともに、受け皿としての地方の実態究明が必要である。また、本稿では、萩の種痘所で接種技術を学んだ多くの存在を確認できたものの、彼等の存在形態、なかなかなく、医療の系統を具体的に明らかにするまでには及ばなかった。今後、残された課題は多い。しかし、筆者にとつて、本稿は、長州藩における在村蘭学の展開を探る上での前提作業であり、大きな意義を有するものである。

# 註

- (1) 田中助一『防長医学史』上・下巻(防長医学史料刊行後援会、一九五一・五三年)。なお、同書は、一九八四年に『防長医学史(全三)(聚海書林)』として、上・下巻を一巻にまとめて再版された。このほか、岡原義二編『青木周弼』(青木周弼先生顕彰会、一九四一年)がある。
- (2) 「済生堂」の呼称は、一般的には用いられず、当時は「医学所」または「医学館」と称された。
- (3) 「医学成立沙汰控」(山口県文書館所蔵)。以下、特に断らない限り山口県文書館所蔵である。
- (4) 「医学成立沙汰控」。

- (5) 「青木研蔵より兄周弼宛書簡」(『防長医学史』下、四六一～四六二頁)。
- (6) 「江戸御状」。
- (7) 「御在国控」。なお、「青木周弼父子」とは、周弼と研蔵を指す。註(4)(6)の史料にもあるように、弟研蔵は、周弼の養子となっていた。当時、周弼は四七歳、研蔵は三五歳であった。嘉永五年二月十六日、研蔵は嫡子となり、手廻組に加えられた。
- (8) 当職(＝当職役)は、藩主の在国の如何にかかわらず藩地に常置され、国務における最高の役職とされた。その役所を当職所という。これとは別に、当役と称する役職が設置された。これは、藩主の在国参勤を問わず、常に藩主に従って決済の事務などを補佐する役職であった。その役所を当役所という。
- (9) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (10) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (11) 児玉三左衛門と三宅忠左衛門の役職については、「役員進退録」で確認した。以下の人物についても同様である。
- (12) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (13) 「医学成立沙汰控」。児玉三左右衛門(当職用談役・三宅忠左衛門(当職右筆)より、仁保弥右衛門(当役手元役)宛。
- (14) 「医学成立沙汰控」。
- (15) 「医学成立沙汰控」。
- (16) 「諸触控」。
- (17) 「医学成立沙汰控」。
- (18) 一二〇六三・五〇六石。内、地方知行高は、一二〇四〇・七一〇石で、その内訳は、三田尻宰判の切畑村に五四・〇三五石、山口宰判の小鯖村に四五・七九三石、奥阿武宰判の鈴野川村に五二・二七一九石、小川村の上小川に三五・二七・七〇石、田万村の上田万に一〇三四・九七五石、下田万に一九九七・三三三石、嘉年村に〇・四七五石、弥富村に二二〇六・八三三石、須佐村に二六六一・七七八石であった(山口県文書館編『防長風土注進案』研究要覧、山口県立山口図書館、一九六六年、三一頁)。
- (19) 八三七・一六九七石。内、地方知行は六六九六・六九六石で、その内訳は、舟木宰判の舟木村に二六九・一三〇七石、吉田宰判の末益村に三六三・〇九七〇石、奥阿武宰判高佐村三七四・四一九石であった(同右、三二三頁)。
- (20) 「医学成立沙汰控」。
- (21) 「医学成立沙汰控」。なお、同史料中には、「十月十三日書付」と記されているが、宛書の月日が十月二十四日であることから、十一月十三日の誤りであると判断した。
- (22) 「医学成立沙汰控」。

- (23) 「医業成立沙汰控」。
- (24) 「医業成立沙汰控」。
- (25) 「先達而以来、於御当地牛痘引種之儀、專ニ取行被仰付、輕症ニ相濟、第一は人江伝染等之儀、曾而無之趣、岩国江相聞候而は、至極懇望被致候、兼而痘瘡之儀は、從來除ケ隔等手堅示被置候事故、不図痘瘡相煩候者御座候時ハ、遠在江取退被申付候故、病人之為不宜否様、惡敷相成候者多く御座候、彼是を以、此度医師三人御当地被差出候、何卒於医学館引痘之儀、執行出来、且岩国江其膿を取帰相成候様致度候、左候得ハ、岩国ニおるても容易ニ相調へ上下互ニ仕合之儀御座候、右之趣厚く御頼申入候様ニと申来候」(「医業成立沙汰控」)。
- (26) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (27) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (28) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (29) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (30) 「諸御書附」。
- (31) 「好生堂沙汰控」。
- (32) 「好生堂沙汰控」。
- (33) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (34) 「好生堂沙汰控」。
- (35) 勘場役の一つである勘場医は、大庄屋以下の百姓側の役人である。
- (36) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (37) 部寄」。
- (38) 「好生堂医学引痘沙汰控」(「医業成立沙汰控」)。
- (39) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (40) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (41) 「医業成立沙汰控」。
- (42) 「医業成立沙汰控」。
- (43) 「医業成立沙汰控」。
- (44) 「好生堂医学引痘沙汰控」。
- (45) 「拝領物書拔」。

(福岡教育大学教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇〇三年三月一七日受理、二〇〇三年七月一八日審査終了)

---

## **The Introduction and Dissemination of the Vaccination Methods in the Choshu Feudal Domain**

OGAWA Ayako

The Choshu feudal domain is a common topic of study in research conducted on the history of the Meiji Restoration. It is for this reason that research on the Choshu feudal domain during the end of the Edo Era and the Meiji Restoration, which has reached enormous proportions, has necessarily centered on political history and economic aspects. The author has, however, stressed the effectiveness of focusing on the Choshu feudal domain during this period from the perspective of the history of Western studies.

As is well known, within research into the history of Western studies at the end of the Edo Era there are two schools of thought concerning the characterization of Western studies during this period. One emphasizes the military science aspect of Western studies, while the other emphasized the spread of Western studies to the regions, that is, Rangaku in rural villages. To put it another way, these two views are simply a question of the type of people who were advocates of Western studies at that time. It is exactly a case of the two categories put forward by Tetsuro Tasaki: the “politician oriented type with a focus on getting close to politicians from inside the system” and the “rural village Western medicine type where as local physicians of Western medicine activities were entirely status related”. There is no intersection in the broader sense between these two views in research currently being conducted on the history of Western studies during this period and additional research continues with these two running in parallel with each other.

The author has previously examined Western studies in the Choshu feudal domain from the perspective of the former, namely, by looking at it from the aspect of military science. However, the author believes that by simultaneously neglecting the latter perspective, namely the issue of Rangaku in villages, it becomes impossible to characterize Western studies at the end of the Edo Era. As has already been studied in “Bakumatsuki Choshu-han Yogakushi no Kenkyu” (A Study of the History of Western Studies in the Choshu Feudal Domain at the End of the Edo Era) (1998), a previous work by the author, more than half the students graduating from famous Rangaku schools in the Choshu feudal domain were village physicians or those who were wealthy local farmers. They accounted for 86% of students in Ogata Koan’s Tekijuku in Osaka and as much as 60% in Ito Genboku’s Shosendo. In this way, at the very least an examination from this latter perspective is absolutely vital for understanding the true nature of Western studies in the Choshu feudal domain. Cognizant of the points outlined above, this paper examines the introduction, implementation and dissemination of the vaccinia virus by Dutch physician Otto Mohnike while investigating their intersection with the latter perspective. It unveils specific

---

aspects while looking at the encouragement given to samurai, retainers and their families during the process of the widespread adoption of vaccinations, the establishment and implementation of vaccination methods in each county, and an approval of vaccinations that exceeded beyond the geographical bounds of the domain's territory.